誤植のこと

武智鐵二

吉永佐野兩氏の「解註寺子屋」（淨瑠璃雜誌第四一七號）を讀んでゐる內、粒椎茸の註釋に至つて、どうしても讀みが下らなくなつた。「椎茸はあの味のあついのが上等」といふのがまことにもことした文章で、何だか意味がありさうな、なさうな。文句なので、すつかり考へ込んでしまつた。「あの」といふのはまだ判るが、「味のあつい」がどうしても判らない。濃く味をつけたといふ意味のことを「味のあつい」と言ひさうもないし、よしさうだとしても、何故それが「上等」なのか少しも分らない。或ひは吉永先生が椎茸を甘辛く煮しめたのが好きなので、「上等々々」と褒められたのかも知れぬと考へ直しても見たが、どうもそれではあまり此の場合の註解に應はしくなさすぎるやうでをかしいと思つた。それで、これはどうやら誤植らしいと氣づいた。然しどこがどう間違つてゐるのか、どうしても判斷がつかぬ。「味」がよし「熱」の間違ひであつたとしても、「熱のあつい」煮きたてのほやほやが椎茸の品質自體の上等下等には關係しさうもない。「あつい」が「あまい」の誤りだと考へても見たが、どうも「あの味の」の「あの」が遊離した感じがする。思ひあまつて、大西さんに訊して見た。ところがこれは「あの」が誤植であつた。元の文章は「あつ味のあついのが」だとある。何のことだ。

どうも世間に誤植の多いのは仕方がないとして、その誤植も大抵は判讀出來るから、大した實害を被むることもさうさうはないのだが、それでも時々はとんでもない思ひ違ひをしたり、又迷惑を蒙つたりすることがある。私の著書「かりの翅」の誤植の數は記錄的に多量だと思ふ。自分の著書だから餘計に目につくのかも知れないが、一概にそのせいばかりでないことも確定である。この著の出版の當時、私は入營してゐて、そのため自身で校正刷に目を通すことが出來なかつたのと、植字の際の草稿とした印刷物自體が相當の誤植を含んでゐたのを、そのまゝ活版に附したのと、この二つの原因で誤植が倍加したのである。唯そのために私の云はんと欲してゐる事と正反對の議論が印刷せられてゐる個所すらある。正誤表を作成するつもりで調べて見たところが、平均一頁に一ケ所以上の誤植があるため、數十頁の正誤表を出さねばならぬことになりさうなので、とう〳〵その計畫を斷念して今日に及んでゐる。

これなどは隨分ひどい方だが、私の生來の惡筆（私自身は富田溪仙張の名筆だと思つてゐるが）のためか、私は實にし

ば〳〵誤植禍を蒙る。現に本誌の先月號（淨瑠璃雜誌第四一八號）の拙稿に於ても、私が古靱太夫の沼津を聞いて「神經病の發作を起して寢込んでしまつた」ことになつてゐる。ところがこれは「神經痛」の誤植であつて、「神經病の發作」では、何だか私がてんかんでも起したやうで、はなはだ無氣味でいけない　惡くすると緣談のかひになる誤植である。それは兎に角、同病相憐み、吉永氏のために校正の勞を取る次第である。

ところで、吉永氏の解註は結構なものであるが、この「粒椎茸」に關しては、もう一つ記述が曖昧なやうに思はれる。これは正誤されてもやはりそんな氣がする。「椎茸の極めて小さく粒の如きもの」といふ註と、「椎茸はあつ味のあついのが上等」といふ事との間に、あまり有機的關聯が見出されないやうな氣がする。強ひて解釋すれば、椎茸の粒が小さい程　笠の面積に對する相對的あつ味が增えるから、粒椎茸とは上等の椎茸なりとでもいふのであらうか。事實粒椎茸は上等で高價なのであるが、それはその相對的あつ味の故に高價なのではなく、又椎茸は厚いほどよいといふのは、普通の椎茸の笠の厚味に關してさうなのである。粒椎茸は品物が少く、美味なるが故に、高價なのであらう。吉永氏の記述によれば、何だか絕對あつ味のあつい大きい椎茸の方が、粒椎茸よりも上等のやうに思へなくもない。それでは何故「粒椎茸の入つたるは奔走子とこそ見えにけれ」だか分らなくなる。

作者は高價な粒椎茸が入つてゐるから奔走子だ、と言つてゐるかのやうである。ところで私は此處に作者の一つの働きがあると思つてゐる。といふのは、一體粒椎茸といふものは、形が小さいところから、佛事の料具に用ひられるものなのだ。だから粒椎茸といふ言葉は一種の不吉感を聽衆に與へる効果がある。而もそれが入つてゐる故に奔走子だと言ひ續けることによつて、聽衆は粒椎茸が高價な上等品であることに氣づいて、何ださうだつたのかと安心する。然もこの最初に起つた不吉な豫感が後に働いて來る譯で、これは同時に我が子をお身替りに立てる松王夫婦の覺悟のほどをも物語つて居り、「包みし祝儀はあの子が香奠、四十九日の蒸物まで持つて寺入さすといふ悲しい事」に響いてゐる譯なのである。粒椎茸の一語は、かくの如く、作者の仕組の底を割つてゐるもので、而も表面は奔走子の說明として取扱はれてゐる言葉として、實演の際には十分氣をつけて語られねばならぬ。

（一八・四・二一）

初代政太夫二百年忌

日本因協會では本年が恰も初代竹本政太夫の二百年忌に相當するところから來る五月二十四日午前十時より大阪天王寺夕陽ヶ丘天瑞寺に於てその法會を營むことになつた。政太夫は二代目竹本義太夫を襲名、後に受領して竹本播磨少掾と稱し延享元甲子年七月廿五日歿、行年五十四、法名不聞院乾外孤雲居士。尙ほ同協會では翌廿五日、四天王寺本坊に於て前記初代政太夫二百年忌と共に太夫、三味線、人形の三業に亘り元祖より今日に至る迄の歷師慰靈祭を執行する豫定である。